



生徒たちが主体的に動くための支援の工夫



南魚沼市立総合支援学校 高等部 上林 夢子



<概要>

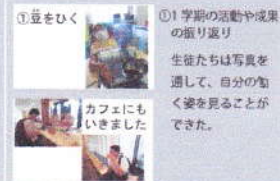
作業学習の中でドリップバッグコーヒーづくりを、生徒の特性に合わせた完全分業制で行っている。今年度、班に所属する生徒が増えたことや、メンバーが職員も生徒も大きく入れ替わったことを踏まえ、教師が常に横についていなくても、生徒たちが主体的に動くための支援を実践していく。

以前から使っていた支援具



全体指導の工夫

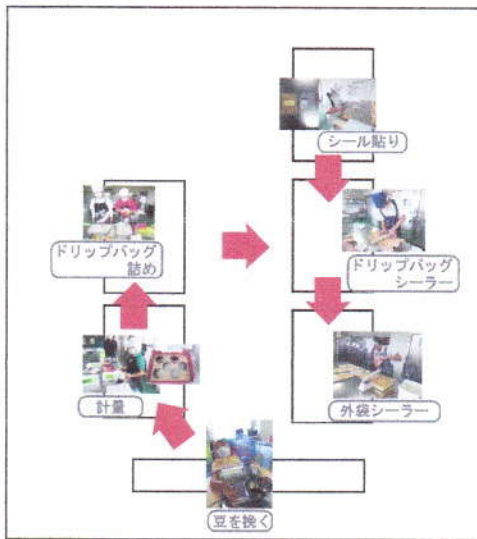
2学期はじめに行った
パワーポイントによる全体指導



① 豆をひく
② 1学期の活動や成果の振り返り
生徒たちは写真を通して、自分の気づきを見ることができた。
③ 2学期の目標の提示
生徒の毎時の個人目標設定に「報告・連絡・相談」など、仕事におけるコミュニケーションに関するものに特化することができた。それによって、生徒たちが物品の受け渡し時に自然と声が出るようになった。生徒も職員も、班が一丸となってコミュニケーションの向上を達成して授業に取り組むことができた。

④ 人数の増減を助けたやりとりの例示
実際にある場面を例示し、「こういふときは何と言おうかな?」と生徒たちに問いかけたり、「仕事を扱う大切な...」をみんなでお声に出していったりと、生徒たちが参加しながら目標の達成に向けて具体的な動きをイメージすることで、コミュニケーション用に作った支援具を、生徒が自発的に使用するようになった。

しごとの流れ

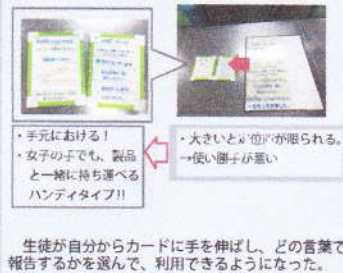


その他

・1つの仕事にかかわる生徒が増えたため、その仕事に昨年度かかわっていた生徒をリーダーとしたことで、自分の仕事に取り組むことが精いっぱいだった生徒が、後輩の手本となる行動がとれるようになった。また、後輩生徒に自分から道具の場所などを教える場面も見られるようになった。
・公開授業では、「少なくとも効果的な声掛けをするにはどうしたらよいか」という授業改善のオーダーを挙げ、他の職員からも意見を聞くことができた。教師が声を掛けるときの言葉遣いや端的に伝える重要性などが挙げられた。

個別支援の工夫

仕事の中で使う言葉のカードの改良



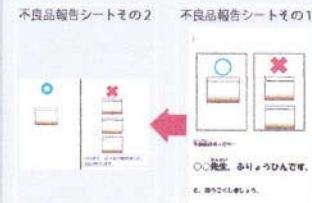
生徒が自分からカードに手を伸ばし、どの言葉で報告するかを選んで、利用できるようになった。

作業場所の配置の工夫



周りの声に反応しづらい生徒に対しては、他の生徒が連絡をしにくる場所の近くで仕事ができるよう、作業場所を設定した。それにより、少しずつ声が出るようになった。

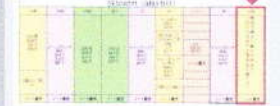
不良品報告シートの作成



その1では、書いてある言葉をすべて読み上げてしまったため、報告の言葉のみが書かれたものに改良した。報告の仕方が身についただけでなく、不良品の判断ができるようになり、不良品が出ないように、気を付けて製造できるようになった。

支援を減らす工夫

自分の仕事の流れを覚え、自主的に仕事を進めることができるようになった生徒に対しては、「今日の流れ」に「自分で考えて進める」と表記し、自分で判断する場面や、相談する場面を意図的に設け、支援を段階的に減らすことで、同じ仕事でもステップアップすることができる。



考察と今後の課題

2学期はじめに全体指導で目標を提示したことにより、生徒の意識の高まりを大きく感じることができた。仕事自体は分業制だが、みんなが同じ目標に向かって、個々に必要な方法をとっていくことができる。今年度の作業班のように活動する人数が多くなった時には、全体指導も利用していくことが有効であると感じた。また昨年度から使っている支援具も少しずつ改良を加え、今年度の生徒が使いやすいものにした。生徒と職員の立ち位置を設定するだけでも生徒の動きに自発性がみられるようになった。公開授業の「少なくとも効果的な声掛けをするにはどうしたらよいか」という授業改善のオーダーについて、様々な意見が出されたが、できるだけ職員の言葉の中の余計な要素を省き、生徒に分かる言葉で端的に伝える必要性を改めて実感することができた。今後は効果的に機能した方法を生かして、まだ改善を要する生徒への支援や、別の仕事への応用としても対応していく。